

令和6年度 第2回岐阜県生涯学習審議会 議事録要旨

1 日時

令和7年1月29日（水）14:00～16:30

2 場所

岐阜県庁20階 会議室2001

3 出席者

委員の現在数13人 出席者11人

<委員>

<事務局>

委員	浅野 欽一郎	環境生活部	次長	西 千代美
委員	浅野 教史	県民生活課	課長	森 信輔
委員	井上 吉博		生涯学習企画監	安藤 由美子
委員	衣斐 淳美		課長補佐兼係長	片岡 留美
委員	奥村 佳子		主査	竹内 洋平
委員	小林 由紀子			
委員	小山 真紀			
委員	高橋 幸平			
委員	堀江 弘美			
委員	米原 木ノ実			
委員	若岡 ます美			

4 報告

令和6年度の生涯学習関連事業実績について

事務局：事業について説明

小山委員：生涯学習関連事業について、カテゴリーごとの仕分けとなっているが、キーワードなどでの探しやすい検索であるか。アクセスにハードルを感じる。

高橋会長：今後の課題として対応をお願いする。

浅野教史委員：トップページにバナーなどを貼ってもらうことは可能か。

事務局：HPのトップページ等の構成は、県全体として管理されている。課ではその中でできるだけ分かりやすい整理をしている。

小山委員：現状のHPは見せる側で作られているように感じる。見る側は、もう少し細かいキーワードをイメージする。他の自治体等も参考に、検討してほしい。

小林委員：県のHPの検索方法を見直してほしい。生涯学習に関連するキーワードだけでなく、見たい検索キーワードがヒットしない現実がある。ぜひ当審議会からも意見していきたい。

奥村委員：生涯学習関係課の事業について、県のHPに事業のねらいがもっと出てきてもよい。関係課と連携して進めていることは分かるが、単体の事業だけでなく、岐阜県の生涯学習として目指す姿としての根幹を明確に見えるようにしてはどうか。

高橋会長：事務局はHPの改善を含め、可能な範囲で進めてほしい。

5 議事

地域づくり型生涯学習を通した学びと活動の循環づくりの実践について

実践発表①公民館を拠点に学びと活動の循環へ（衣斐委員）

高橋会長：衣斐委員の発表を受けて、各委員よりご意見を賜りたい。

小山委員：揖斐川町出身のげんさい未来塾の塾生で、地区防災計画を作りたいという動きがあるが、小島公民館の各部会の活動とリンクすることはあるか。

衣斐委員：現在その動きを生かしてもらえるよう、部会の中で考えられている。

小山委員：一人ひとり活発に活動しているが、つながっていない部分があると感じる。自分ではなかなか気付かないが、それはこうつながっていると助言することが必要かもしれない。大人がかっこいいということはとても大切だが、大学生をみても大人との接点がないので、仕事へのイメージがもてない。イベントだけでなく、様々な年代に生き方を含めた交流が広がるとよい。

堀江委員：活動の中核は衣斐さんか、周りの何人かで行っているのか。また、中学生たちの地域参画について、夏祭りやおじまあーる LUNCH といったゴールがあって計画するのか、それとも自然発生的なのか。

衣斐委員：小島公民館は非常勤3名で運営している。仲間を増やしていくため、最初は10人ぐらいの企画員という公民館の核となるメンバーが週に何回か集まって話し合いを行った。その核となるメンバーの他に、子育て応援団、高校生のOB、高校生、大学生といったグループができ、イベントごとに集める人数や、活躍する世代等を決めてお声掛けをしながら進めていくという形で運営している。中学生は夏祭りの計画をする中で、様々な年代と交流する。夏祭り後も、公民館は気軽に話せる場、多くの方と関わるができる場で、交流をとおしてこの行事にも参加したいと自然に希望するようになっている。

堀江委員：公民館は子どもが帰ってきたら閉まっているという場合が多いが、小島公民館はいつも開いているか。

衣斐委員：行事があるときしか開けていない。しかし、開いていない時間も子どもたちは公民館のフリースペースであるテラスに集まっている。

奥村委員：揖斐川町は行政が主導ではなく、公民館が主体となって、このような地域で学びが循環する仕組みを作ってこられたことが素晴らしいことで、大き

な発見であったし、そのパワーに感動した。行政主導だとやらされているという一面もあり、息切れし始めていくこともあるし、地域のやる気や核となる人の熱意を見せるコンセプトがなければぶれてしまう。これは新しい気づきであり、各地域の中で学びが循環し、それを発信するということは、これからとても大事だと感じた。

小林委員：多くの地域の公民館は、お年寄りが核になっていて、なかなか小学生が来たり中学生が来たりすることが少ないが、小島は子どもが核になっていてよい。地域の中で、小島が好きということが循環している。そして、一生懸命に活動している大人がかっこいいと思う高校生、その高校生たちに憧れる中学生、中学生に憧れる小学生といった循環ができており、各世代がイベントに参加できるシステムができていることが素晴らしい。

浅野欽一郎委員：公民館主体で活動をする人がつながり、その地域での深みが出ると思う。小島から他地域への波及効果はあるか。

衣斐委員：幼児学級や行事については、SNSを活用し、揖斐川町内どこからでも参加できるよう広報している。中学生の夏祭りに関しては、小島の皆さんの密接につながりたいという強い思いがあり、小島の子どもたちだけで行っている。揖斐川町の各地域で様々な課題があるので、町内の他の公民館への広がりには難しい。小島だからできると言われるのはさみしいので、今後も県内、全国で地域づくりに取り組んでいる所とつながっていききたい。

浅野欽一郎委員：関市でも地域委員会で新しい自治のあり方を模索しているが、イベントの実施から先へ進めない現状もある。小島地域づくり協議会は行政主導ではなく、地域からボトムアップで出てきたものか。

衣斐委員：そのとおりである。そのため、行政からの支援はなく、説明や金銭面で苦労することもある。他地域からも講師を招いて話を聞くなど、今後の小島に必要であることを説明している。

米原委員：実際にマルシェやカフェに参加し、小島公民館が開かれた公民館であることを実感したし、他地域の方が来ても温かい雰囲気があった。少し上の世代のよい姿に憧れて、地域で学びが循環していくことがよく分かった。

高橋会長：公民館を拠点とし、地域の中で学びが循環する、素晴らしい取り組みである。

実践発表②笑顔がつながる地域づくりを目指して～居場所と対話でつくるつながり～ (堀江委員)

高橋会長：堀江委員の発表を受けて、各委員よりご意見を賜りたい。

浅野教史委員：わたしは幼稚園という場で仕事をしているが、ないところに自分の活躍の場をつくっていく姿勢や、地域に子どもたちの活躍の場を作ろうとする姿勢に感動したし、尊敬する。PTA活動について課題はあるが、幼稚園でPTA活動をしている保護者は楽しんでいると感じる。子どもをとおして、新し

いコミュニティ、つながりをつくっており、PTA 活動を大事な場であると思う。PTA として集まった人たちで、何ができるかを考えることがよいことである。各小学校の PTA 会長が集まって話をする雑談会の取組みはとてもよいと思うが、今までもこのような取組みはあったか。

堀江委員： 過去は年 2 回 PTA 会長が集まる懇親会があったが、今はなくなり、横のつながりがなくなってしまった。わたし自身、会長として横のつながりがないと困ると考え、雑談会をつくり、今も継続している。

浅野教史委員： 雑談会の取組みは、PTA 活動の良さを広げるためにとてもいいことだと思う。今後連合会等でも、保護者同士の交流の場をつくっていかなくてはと思う。

奥村委員： 生涯学習という視点で交流を行い、横のつながりをつくる場があることで、普段気づかない気づきがある。今の時代、なかなか役職をやりたい方が多いが、この気づきの大切さについて、堀江委員の取組みをとおして発信することがキーポイントだと思う。わたし自身もこのように皆さんと情報共有をする中で、刺激と学びをいただいている。ビジョンをもっていく場も大切だが、取組みを伝える場は大切である。

井上委員： 運営についていろいろな形態があるが、一般社団法人という運営方法にしたのはなぜか。

堀江委員： 社会的な信用を得るため、一般社団法人か NPO を立ち上げることを考えた。人数の関係で、一般社団法人とした。

小山委員： 岐阜県は子どもたちの自尊感情が低いということであったが、この活動をとおして子どもたちの自尊感情は上がっていると感じるか。

堀江委員： この活動をとおして子どもたちと直接的に関わることはないので、上がっているという評価は難しい。

小山委員： 今は人と人との直接的な関わりが希薄になっており、オンライン等でのコミュニケーションは言葉が極端になりがちであったり、行間が読みにくかったりと、ニュートラルな言葉が攻撃的に受け取られることもあり、全体的に自尊感情が上がりにくい現状がある。その中で、安心感を伝え合う関係性を構築するにはどうすればよいか。今の若い人たちは、その関係性をどのような場でつくっていくのか。

堀江委員： 学校で自己肯定感を高める活動をしているが、自分のいいところを書けない子どもがたくさんいる。まず自分の良さを書いて、その強みを生かすにはどうするのか、誰の力を借りればよいかを考える。地道だが、子どもも大人も自分は最高と思える瞬間をつくる活動を続けていくしかないかと思う。

小山委員： 運営について、収支はどうか。

堀江委員： プラスマイナス 0 である。

小山委員： 自分が無理をすると、周りも影響を受けるので、やはり無理なく続けていくことが大切である。

高橋会長： 堀江委員は今も PTA 会長として活躍されており、保護者の学びに関して素晴らしい取り組みを実践していらっしゃる。

実践発表③「様々な困難を抱える子どもや保護者の生涯学習とは」～見えない子どもの実情から考える～（若岡委員）

高橋会長： 若岡委員の発表を受けて、各委員よりご意見を賜りたい。

小山委員： 無料塾という子どもへの支援ということだが、進学すると支援が切れる、また就職すると支援が切れるといったケースがある。塾の中でのつながりはあるかもしれないが、子どもたちが大きくなったときの支援等で関わりはあるか。

若岡委員： 学年ごと、また小、中、高と上がっていく中でその都度対応するようにしている。高校では退学もあるし、大学も金銭的な面等からやめてしまうケースもある。しかし、奨学金など関係機関と連携したり、SNS などこまめに連絡したりするが、どんどん活動が増えてしまう現実があるので、自分自身のネットワークだけでなく、子どもに関わる行政の各所と連携して取り組んでいる。

奥村委員： 子どもたちがキッズな（絆）支援室につながる方法は何か。運営について、助成金等をもらって活動をする際の各種手続きは、本当に労力が必要であることに共感する。

若岡委員： まずは活動をすること。そして発信し、言い続けること。続けることで、生活困窮に陥る前にと、市も予算を獲得してくれる。立ち上げだけ支援があって、その後は自立して活動するように言われることもあり、スタッフの善意に頼る部分もあるので、もっと声を上げないといけないと思う。

奥村委員： やはり発信し続けることが大切である。資材が高騰し、お金とマンパワーのバランスが難しい現状がある中で、活動がぶれないようにするためには、体力が必要である。このなくてはならない駆け込み寺において、どのように人がつながっていくのか。

若岡委員： ロコミや行政の各部署との連携によりつながっている。キッズな（絆）支援室で学習支援を始めて、他に思いを同じにする 15 団体とともに岐阜学習支援ネットワークをつくった。そのネットワークのつながりはすごく深い。市にはそのネットワークへ支援をお願いしている。より多くの家庭を支援するためには、団体間のつながりが必要である。

高橋会長： 困難を抱える子どもの実態など、知らないことがたくさんある。その事実を知ること、そして多くの方への学びにつなげていくことが重要である。

[以後、事務局に司会進行を戻す]